渡辺伸行さん（狩場台）　平和を願って～シリーズ　東アジア世界の一員として（2018.7～2019.3）

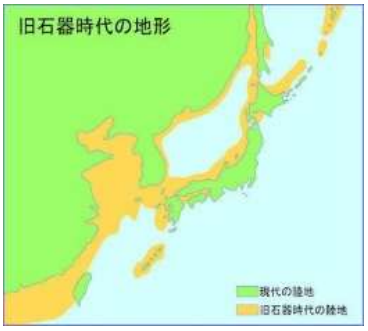
INDEX

シリーズ　東アジア世界の一員として（1）　日本列島の成因と旧石器時代の人々（2018．7）
シリーズ　東アジア世界の一員として（2）　縄文時代という時代　（2018．9）
シリーズ　東アジア世界の一員として（3）　土器の出現と縄文人　（2018．10）
シリーズ　東アジア世界の一員として（4）　弥生社会の始まり　（2018．11）
シリーズ　東アジア世界の一員として（5）　東アジア世界への倭人登場　（2018．12）
シリーズ　東アジア世界の一員として（6）　渡来文化と渡来人　（2019．1）
シリーズ　東アジア世界の一員として（7）　仏教伝来と飛鳥・白鳳文化　（2019．2）
シリーズ　東アジア世界の一員として（8）　仏の国土と天平文化　（2019．3）

東アジア世界の一員として（1）日本列島の成因と旧石器時代の人々　渡辺伸行　（狩場台）

シリーズ「東アジア世界の一員として」は、当会の5月例会で報告した内容を、連載で少し詳しく紹介するものです。東アジア東端の列島で政治統合を果たし、東アジア諸国との交流から、文化形成・国家形成をなし遂げた古代日本の歩みを辿ります。

1　日本列島の成因と旧石器時代の人々



私達が住む日本列島、その成り立ちを知ることは、この島に住み続ける上で大切なことです。

今から約 3000 万年前に、アジア大陸地下のマントルの活動で東端の陸地が裂け、西南日本と東北日本の元になる二つの陸地が、大陸から離れて移動を始めました。東北日本は反時計周りに回転し、西南日本は時計周りに回転し合体し、二つの陸地の間にフィリピン海プレート上の火山性地殻が衝突し、新たに伊豆半島ができました。そして 1500 万年前には、日本海が開かれ、火山活動が活発な現在の日本列島の原形ができたとされています。

それから長い年月が経過し、今から4万年前の後期旧石器時代に、私たちの祖先ホモ・サピエンスはシベリアまで拡散し、その人々の中から日本列島にきた人々がいました。

列島に人類が登場した頃、当時はヴュルム氷期で、冷涼で乾燥した気候が支配していました。人々はオオツノジカ・ヘラジカ・ナウマン象・マンモスなど大型哺乳類を追って遊動生活をし、寒さを避けるため岩陰や洞窟内を一時居住の場所にしていたと思われます。

海面も現在より 120～140m降下していたと思われ、水深 140mの津軽海峡や朝鮮海峡は、狭い川のようであったと推定されます。冬季は氷結した海峡をわたって動物や人が渡ってきたことでしょう。

旧石器人骨が沖縄本島の港川（1.8 万年前）と石垣島白帆竿根田原（2.7 万年前）などで発見されていますが、低身長で上半身華奢な骨格や顔面の特徴は、その後の縄文人には繋がらず、南アジアの人々と類似していました。

縄文人骨のミトコンドリア DNA 分析では、縄文人は中国東北部・中央アジア・朝鮮の人との類似性が高いことから、旧石器時代の人々はサハリン・北海道経由、朝鮮半島経由で、日本列島へ渡ってきた可能性が高いと思われます。彼らが使用した石器の形や技法は、本州の東と西では異なり、一方北海道はシベリアと、九

州は朝鮮半島と類似しており、日本列島内で完結していたわけではありません。旧石器時代の人々は、まだ大陸と繋がっていたのです。

東アジア世界の一員として（2）　縄文時代という時代　　渡辺伸行　（狩場台）

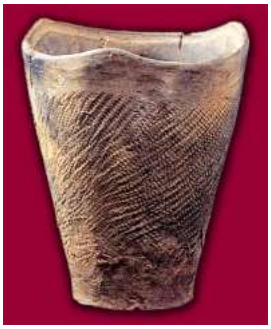
狩猟採集社会に生きた人々のことを、私達は記憶の中に持ち合わせていません。彼らがどのような心性を持ち世界をみていたか、彼らが環境とどう折り合って生きていたか、分からないことが多いです。それは２千数百年前に稲作農耕を開始し、その文化を今に伝えた私達の祖先が、縄文の伝統とは縁がなかったことの表れです。例えば空高く立てられた太い木柱、木や石の円形施設（ウッドサークルやストーンサークル）、土偶や石棒などは、私達現代人の合理精神からは理解の彼方にあります。

彼らが生きた時代の環境は、もちろん今とは大きく異なるものでした。縄文時代草創期～晩期１万年の間に氷河期から温暖な海進時期、そして再寒冷化の時期を経験したのです。今から約１万２千年前、氷河期が終わり、地球上は温暖化に向かいます。降下していた海面も徐々に上昇し、日本の四囲は現代と近い自然環境になります。この環境変化は縄文草創期～早期前半（1万６千～9 千年前）の極度に乾燥した時期を経て、縄文前期（6 千年前）にかけ徐々に進み、植生も西日本は南九州から照葉樹林が広がり、また東日本は落葉広葉樹林が覆います。

縄文時代は、狩猟や漁撈・採集・栽培に基礎を置く時代です。その特色として、定住生活・土器使用・弓矢の発明それに漆利用などがあげられます。歴史の三時期区分法では新石器時代に属しますが、中東と異なり農耕・牧畜をしなかった社会です。私は縄文の地勢や風土が豊かな自然の恵みを生み、それが理由で森の人であった縄文人が農耕（穀物栽培）を行わなかったと考えています。

縄文草創期から早期（約１万６千～7千年前）にかけて、移動生活から定住生活に移行していきました。初めは周囲の落葉広葉樹林から堅果類を採集し、粉に引くため季節毎に定住し、その後は通年の定住に変わりました。定住による環境汚染や人間関係のストレスがあったとしても、幼子を連れ、生活用具を持ち運ぶ大変な移動生活より、集落の周辺から生活の資を得る定住生活を縄文人は選択したのです。土地利用の歴史がここに始まりました。

東アジア世界の一員として（3）　土器の出現と縄文人　　渡辺伸行　（狩場台）



縄文人は地球環境が大きく変化した時代に、それに適応して見事に生き延びた人達です。主な食料の大型獣が絶滅した中、小型獣を捕獲する弓矢を発明し、土器を使い始めました。

日本列島では青森県津軽半島から１万6千年前の土器が出土しています。でもその当時、地球上はまだ氷河時代で、冷涼な気候が支配した時代でした。北海道の道東や道北の気温が、関東～西日本の気温でしたから、その寒さは推して知るべしです。では食用の植物がない時代、土器を携えてきた人々は、それを何に使用したのでしょうか。研究者が土器に付着した痕跡を調べた結果、魚を煮炊きしたことが分かりました。土器を使い始めた人々は、寒冷下でも豊富に獲れる魚を食料にしていた

のです。北東アジアでは、人間が発明した焼き物＝土器は、火にかけて暖かいスープを得るためのものでした。

さて縄文人とはどんな人達でしょう。旧石器時代の終わりに列島に残った人々と、北方からきた人々、朝鮮半島から渡ってきた人々が、日本列島の環境に適応して融合し、その後縄文人となっていきました。縄文時代の初めの列島の土器は、東日本・西日本・南西日本の三つの分布圏に分かれますが、列島への彼らの渡来の経路が分かります。

その容姿・体形は、身長 150～160cm で手足が長く、顔は大きく彫りの深い顔立ちで、休息するときは蹲る習慣を持つ人々。およそ北海道から九州まで、ほとんど同じ身体的特徴をもつ人々でした。彼らは北米最後の野生インディアン、イシのように、周囲の自然環境や動植物の知識が豊富で、命を与えてくれる恵みに感謝する敬虔な心を持つ人々だったと思います。音をたてず静かに歩き、獲物を狩るときは、敬意と儀礼なしには弓に触れることはなく、食物連鎖の世界で、動物たちが容認する範囲で狩りをしたのでした。

縄文人がタイムスリップして現代に現われたとすると、小柄で足が長く、筋肉質の体をした彫りの深い顔立ちの彼らを、私たちは容易に見分けられるでしょう。現代人にも縄文人の遺伝子は伝わっている筈ですが、私たちはその心を忘れてしまっています。

東アジア世界の一員として（4） 弥生社会の始まり 縄文から弥生へ　　渡辺伸行　（狩場台）

この夏は東京国立博物館で『縄文』展開催、映画『縄文にハマる人々』が上映されるなど、縄文時代への関心は高まっているようです。しかし、縄文人は私達とはまったく異なる思考を持つ人々だったことを理解せず、単純に日本人の祖先だと思うなら、それは大きな誤解です。考古学者が彼らの内面に迫る研究を進めていますが、なかなか素顔が見えません。

さて縄文人たちは縄文後期～晩期に、次第にその数が減少していきました。気候の再寒冷化がその理由だと思われます。そこへ水稲耕作文化をもつ弥生人が登場し、縄文人の生き方に影響を与えます。

列島の縄文社会に稲作文化を携えやってきたのは、朝鮮半島の人々でした。氷河時代の極寒期をシベリアで過ごし、寒冷地に適応した体形を持つ人々、我々現代人に繋がる人々です。渡来弥生人の身体的特徴は、高い身長、面長で凹凸が少ない顔、細顎に大きな歯、鋏状の咬み合せなど明確に縄文人と区別できます。

彼らは、縄文人が利用しなかった低湿地を開発し、水田を開き、大勢の人と共に年中水田に関わり、栄養価の高い米を収穫し、縄文人とは異質の生活をする人々でした。その上、縄文人には目新しい金属器を持つ人々で、人口比も縄文人より優位に立ちました。

豊かな稲穂を目にし、縄文人は弥生人の村へ行き、特産品を米と交換したのでしょうか。彼らの言葉と弥生語は、意味が通じたのでしょうか。私達に縄文語を知る手懸りが全く残されていない以上、知る由もありません。縄文人は森での生活に行詰り、弥生人と交流を始めたのでしょうか。西日本の縄文人が、社会発展や階層化を望まず、自然と調和する生活を求める人達だとしたら、彼らは大きな方向転換をしたことになります。彼らが森を離れた真意は未だに謎です。

近畿地方では、稲作農耕は在来の縄文的特徴を持つ人々に受け入れられ、縄文人が進んで弥生人になりました。そのときから縄文の価値観や伝統は忘却され、私達の祖先は文明社会へ突入し、自然開発、社会発展・拡大の道を歩み始めました。それから2千年、環境の世紀に生きる私達は、持続的開発と調和の間で揺

れています。

（写真参照元　国立科学博物館　―　編集委員）

東アジア世界の一員として（5）　東アジア世界への倭人登場　　渡辺伸行　（狩場台）

東アジアの国際社会に倭人が登場するのは、紀元前２世紀初めの頃でした。古代帝国漢が朝鮮半島に置いた楽浪郡に倭人が朝貢し、中国人に知られることになりました。この時以降７世紀まで日本列島に住む人々は倭人と呼ばれ、その国は倭国と呼ばれました。

その後、紀元１世紀半ばには倭奴国、２世紀初めには倭国王帥升という名が中国の正史に登場します。倭人、倭国が中国を中心とする東アジア世界の中で、その存在を認められていたことがわかります。そして３世紀には、著名な邪馬台国が登場します。

倭人とは倭国内に住む人々のことで、その構成は縄文系の人々、朝鮮・中国系の人々、両者の婚姻による２世、３世などですが、その精神的な支柱は文明国中国を模範とする価値観です。弥生時代の初めまで遡ってみると、縄文社会が新来の稲作農耕文化を受け入れていく過程で、列島に住む人々の価値観も東アジア世界の価値観に染まります。倭と中国との文化の差、力の差は大きく、中国を中心とする東アジア世界の秩序に属し、自らの社会を形成することを倭人たちは望んだのでした。

周囲の自然環境の中で自足し、調和的な生き方を志向する縄文人なら、中国への朝貢など思いもしなかったでしょうが、倭人は稲作を受容した時点で、「文明を築いた古代帝国」を範として、社会拡大への道に一歩踏み出し、もはや後戻りできなくなりました。

邪馬台国は、女王卑弥呼の存在で魅力が尽きない国です。邪馬台国は２世紀の倭国大乱を経て倭国の主導権を握り、すでに大人、下戸、生口、奴婢という階級社会になっていました。邪馬台国には、中国・朝鮮系の人もいて、国際社会のルールを知り、文字を使いこなし、対魏外交でも卑弥呼のブレーンとして力を発揮したと思われます。

３世紀の朝鮮半島は中国支配下にあり、馬韓・弁韓・辰韓に分かれて国家形成が遅れたことは、邪馬台国にとり魏と通交する好機でした。魏にとっても呉・魏・蜀三国鼎立の時代、倭は呉を牽制する重要な国でした。卑弥呼は三国のパワーバランスを利用し、魏から親魏倭王に叙せられ、倭国内で盟主の地位を維持したのです。

東アジア世界の一員として（6）　渡来文化と渡来人　　渡辺伸行　（狩場台）

邪馬台国が中国の資料から消えた３世紀後半から４世紀後半は、日本史では謎の世紀と呼ばれています。その間に、ヤマト王権を中心として前方後円墳の祭式を共有する豪族たちの同盟が生まれ、倭国は東北北半と九州南部を除き、統一されたのでした。

４世紀に入ると朝鮮半島では、前漢以来長らく中国王朝の支配拠点だった楽浪郡と帯方郡が高句麗に滅ぼされ、動乱の時代に突入します。

再び倭が記録に登場するのは４世紀末のこと。有名な高句麗広開土王の碑文に現われます。国家形成が進む朝鮮半島の政情に介入し、半島南部へ侵入したというのです。碑文では、好太王が倭を撃退したと述べ

ています。倭軍は高句麗軍と対戦して、騎馬を用いた機動力に圧倒され、積極的に進んだ文化の導入を図ります。馬を飼い、武具や馬具を作る技術を取り入れました。その役割を担ったのが渡来人です。

倭に朝鮮半島からの渡来人（伽耶・百済・高句麗・中国系）や渡来文化が目立つのは、4 世紀末以降です。渡来人は、鍛冶の技術、織機、馬の飼育、貯蔵や供膳具の須恵器製作、竈と甑、酒造り、制度、文書作成など倭人の生活の細々したところまで影響を与え、その風習と生活を変えたのでした。殆ど革命的変化といっても過言ではありません。

5 世紀に入ると、倭王は朝鮮半島での倭国の軍事的支配権を中国王朝に認めてもらうため、使者を派遣します。中国の史書に名前が残る倭の五王です。倭王武のとき使者が持参した文書には、中国古典を引用した美文が綴られていたため、その全文が正史に残されました。そのような文章を書けたのは、東アジア情勢に明るい渡来系の官人だったと思われます。

大和の葛城や飛鳥地方、大阪の北河内、近江の湖西地方、播磨など渡来人が住んだ村では、大壁作りの建物やオンドルが見つかっています。墓では横穴式石室という家族墓を築き、倭人の墓に影響を与えました。5 世紀以降、倭では渡来文化の影響抜きでは、暮らしや文化を考えられなくなりました。それからおよそ 200 年をかけて熟成した渡来人の文化は、飛鳥・白鳳・天平文化として花開くのです。

東アジア世界の一員として（7） 仏教伝来と飛鳥・白鳳文化　　渡辺伸行　（狩場台）

采女の袖吹き返す明日香風、都を遠みいたづらに吹く（志貴皇子『万葉集』巻 1-51）

倭五王時代最後の倭王、武の後河内王権は断絶し、6 世紀初めに越前・近江・東海地方に基盤を置く継体大王が登場します。継体王権は、倭の影響下にあった朝鮮半島の全羅道東南部を百済に譲渡し、その見返りに 538 年仏像・経典・幡・蓋が献上されます。

それから半世紀後の 588 年に、日本で初めての仏教寺院が誕生します。蘇我氏が主導して建立した飛鳥寺です。門に取り付く回廊で囲まれた境内には、朱塗り柱に白壁、瓦屋根の金堂や高い塔が聳え、金堂内には黄金色をした金銅仏や刺繍仏などが安置され、倭人が目にしたこともない世界が出現したのでした。仏教寺院は人々を瞠目させ、新しい時代の到来を感じさせました。

飛鳥寺に注がれた瓦、金工、仏像、幡、仏画などの技術や礎石建ちの建物は、渡来人がもたらしました。渡来人を率いて時代をリードした蘇我氏の力は、王族をも凌ぐようになり、それが後に王族によるクーデター（大化改新）を招いたと思われます。

飛鳥仏教が深みを増すのは、聖徳太子以降のことです。聖徳太子が亡くなってから、妃の橘大女郎（たちばなおおいらつめ）が、天寿国に往生した太子の姿を描きたいと推古天皇に願い出て製作したのが、天寿国曼荼羅繍帳です。そこには太子が住む彼岸の世界が描かれ、刺繍された亀の甲羅には、太子の言葉「世間虚仮唯仏是真」が縫い取られていました。権謀術数渦巻く人間世界を喝破し、仏の教えこそが真理だとする太子の悟りの言葉だと思われます。

7 世紀後半白鳳文化の時代には、仏教に帰依する人々も増え、仏像の銘文には、親や夫人の菩提を弔うため、造像した由来が刻まれています。愛らしく明るい表情の小金銅仏を厨子にいれ、日々祈る姿がみられたことでしょう。高松塚古墳壁画に見られる男子群像、女子群像の溌剌とした姿には、新しい社会を創り出し

た大王と中央豪族の気概が感じとれます。飛鳥・白鳳文化は、倭五王時代から2世紀を経て、渡来系の人々の知識や技術が倭国の風土に溶け、見事に開花した文化でした。

（右上図は明日香村作成・飛鳥寺創建時伽藍配置鳥瞰図　編集委員）

東アジア世界の一員として（8・完）仏の国土と天平文化　　渡辺伸行　（狩場台）

7 世紀末、明日香から離れ、現在の橿原市に藤原京が作られました。わが国で初めて碁盤目状に道路が交差する都の誕生です。ところがこの都は造られて 10 年もすると、遷都が議論されるようになりました。天子南面という中国の思想からみて、宮の立地に問題がありました。

そして 710 年、都は平城京に遷りました。平城京の時代はまさに仏教による国土の統一と鎮護が目指された時代でした。都には大安寺・元興寺・薬師寺・興福寺・唐招提寺・西大寺・東大寺・法華寺などの寺院が建立されました。聖武天皇は国分寺を全国に建立し、東大寺を総国分寺として、仏により守護された国を実現しようとしました。平城京の各寺では、金光明最勝王経の読経の声が聞かれたことでしょう。

都へは全国から物資が運ばれ、「それ天下の富を保つ者は朕なり」という聖武天皇の言葉どおり、皇族や貴族の生活は豪華なものでしたが、地方の疲弊という矛盾を抱えた社会でした。華やかで爛熟した天平文化はその上に築かれたのです。

天平文化を築いた人々の多くは、渡来系の人々です。東大寺大仏のために陸奥国から黄金を献上した百済王敬福は、亡命百済王族ですし、大仏を鋳造した国中連公麻呂も亡命百済人の孫です。天平仏の傑作、東大寺三月堂日光・月光菩薩や戒壇院四天王の塑像を製作した造仏所の仏師も渡来系の人だと思われます。また興福寺西金堂の八部衆や十大弟子像は、当時の若者をモデルとして唐から学んだ最新の技術、脱活乾漆で造られました。名前が残る仏師・木工・画工・銅工らは、渡来系技術者でした。すでに日本の風土に同化し、日本的な感性で作品を制作しました。 渡来系の人々は、その後学問・芸術・宗教・政治・軍事・官僚の世界に進出し、各方面で活躍します。奈良時代の僧行基や平安初期の菅野真道、坂上田村麻呂もその後裔です。

日本を代表する飛鳥・白鳳・天平文化の多くは、渡来系の人々により支えられました。日本人と日本文化の基層には、渡来系の血脈と文化が横たわっています。私達はこのことを深く心に留め、日本と東アジア世界を考えてみる必要があります。

（本シリーズも今回が最後です。半年間お付き合い頂き、有難うございました。）